1　事業名　　日独学生青年リーダー交流

2　必要性

平成８年の橋本首相とコール首相の日独首脳会談において、次世代を担う日独青年の交流が今後一層拡大されるべきであるとの共通の認識が確認された。平成９年６月のデンバーサミットにおいて、日独両国政府が共同で発表した「日独青少年交流の強化についての共同発表」に基づいて、日本とドイツの青少年団体等でリーダーとして活動する学生・青年等が、文化体験、意見交換、機関や団体で体験活動等を行うことにより、青年リーダーとしての資質を高めるとともに、日独の相互理解と交流の発展を図ることを目的とした「日独学生青年リーダー交流」がスタートすることとなった。

3　趣旨

本事業は、日独両国の青年リーダーが国際性豊かで、社会に積極的に参画していくリーダーとなることを目的に実施する。

ドイツと日本では青年の社会参画についての考え方や制度等に相違点があるが、今後より多くの青年たちが社会に参画する必要があるということは、両国の共通課題である。平成 24 年度は、日独の青年リーダー同士が中央と地方において意見交換や共通体験を行い、若者の社会参画の意義や姿勢について考えを深める事業を実施する。

4　共催

国立青少年教育振興機構

5　期日

受入期間：平成 24 年９月　４日（木）～平成 24 年９月 10 日（月）（7 日間）
（全 体 受 入 期 間 ：平成 24 年８月 29 日（水）～平成 24 年９月 11 日（火）（14 日間））

6　参加者（ドイツ団）

（１）募集対象・人数

ドイツ連邦共和国に在住し、青少年団体等においてリーダーとしてボランティア活動や社会貢献活動を行っている者で、ドイツ政府・ドイツ側実施機関であるベルリン日独センターにより選出された者。人数は、団員（職業訓練学校生や社会人を含む 18 歳～26 歳のドイツ人学生青年リーダー）15～16 名、団長 1～2 名、計 17 名。

（２）参加人数

団員 16 名、団長１名、計 17 名。

（３）随行者

独立行政法人国立青少年教育振興機構　子どもゆめ基金部　国際・企画課担当職員１名（三浦真依子）
通訳１名（阿部利永子）

7　講師等

（１）講師

坂本　弘治（国立三瓶青少年交流の家研修指導員　自然観察）

柳楽　天児（国立三瓶青少年交流の家研修指導員　自然観察）

（２）通訳

大薗　正彦（島根大学外国語教育センター　教授）

（３）ボランティア

法人ボランティア（島根大学生 13 名、島根県立大学生 6 名）

（４）協力

島根県立津和野高等学校 1、2 年生

多根神楽団 13 名

ホストファミリー15 家族

8　参加経費

実費のみ

9　事業の内容

（１）事業の特色

平成 9 年より実施された本事業は、2 週間の滞在期間の前半 1 週間は都市部で行い（東京プログラム）、後半は地方受入施設で行っている（三瓶プログラム）。地方受入施設でのプログラムを、地方施設と本部の積極的な連携協力により企画・運営し、国際交流事業のさらなる充実を図る。事業のテーマは「若者の社会参画」であり、ボランティアとの交流等を通して社会参画について考える。

地方施設のプログラムを企画するに当たり、特徴的な研修支援プログラムの体験や、日本文化体験、同世代の青年リーダー（法人ボランティアや社会教育実習生等）との交流を組み入れるようにする。

（２）プログラムデザインと企画のポイント

本事業のねらいのひとつとして「参加者の資質向上と日独の二国間の人的交流の深化」とある。そのため三瓶プログラムでは、①人的交流、②日独のボランティアの相違への気付き、③当施設の代表的なプログラム体験、の 3 つの柱を考えた。

<u>①人的交流</u>

まず、人的交流として、(1)高校生との交流、(2)大学生との交流、(3)日本の一般的な家族との交流、を企画した。

(1)では、島根県立津和野高等学校に交流をお願いした。津和野高校はドイツと国際交流をしており、平成24年2月には生徒数名がドイツを訪問している。文豪森鴎外が留学したということでドイツとゆかりの深い津和野町の高校生と交流することは、ドイツ団や津和野高校生にとって今までよりも深くお互いを理解できると考えたからである。また、ドイツ団は東京プログラムでは高校の訪問をしていないため、今回の津和野高校では高校見学をはじめ、学校紹介や部活動紹介など高校生活についても学んでもらおうと企画した。津和野高校とは事前に打ち合わせ会を開催し、津和野町教育長、津和野高校、当施設と三者が相談して企画を練った。

(2)では、法人ボランティアとして当施設で活動している島根大学、島根県立大学の学生 19 名を招いて、2 泊 3 日の日程でドイツ団と共に生活することで日独の大学生同士の交流を深めようと考えた。具体的には、ドイツ学生 1 名に日本の学生 1～2 名をバディとし、本施設の使い方や活動場所の案内、活動の補助等を行えるようにした。また、夜は自由時間とし、ドイツ団の希望する活動を法人ボランティアとともにできるようにした。そこでは自由にカプラを行ったり、キンボールやフットサルなどのスポーツをしたりして、ドイツ学生と法人ボランティアとの交流を深めることができた。なお、交流をするには相手のバックグラウンドを知っておくほうがより交流が深まると思い、この交流に先駆け、法人ボランティアを対象に事前学習会を開いた。学習会では、日独の教育や文化の違い、ボランティア制度について大学教授から説明をしていただき、ドイツと日本の相違を理解できるようにした。

(3)では、平成 24 年度も、1 家族にドイツ団 1 名がホームステイし、ドイツ団に日本の家庭を深く体験できるよう、16 家族を確保しようと考えた。そして、ドイツ団のボランティア歴や趣向にあった家族とマッチングすることで、ホストファミリーとより深く交流できるようにした。なお、ホストファミリーに向けて事前に説明会を開催した。説明会では、本事業について説明したり、平成 23 年度のホストファミリーから体験談やアドバイスを受けたりして、安心してドイツ団を受け入れてもらえるようにした。

そして、上記(1)～(3)を、高校生との交流、法人ボランティアとの交流、一般家庭との交流の順に行い、ドイツ団との交流に高校生→大学生→一般と交流の相手がより社会とのつながりが深くなるよう企画した。

②日独のボランティア活動の相違への気付き

日独のボランティア活動の相違に気付くために、ボランティア活動に関する意見交換を企画した。津和野高校の生徒との意見交換では、時間が限られているため、高校の代表生徒との意見交換の中で高校生のボランティア活動についても意見交換ができるように打ち合わせをした。

法人ボランティアとの意見交換は平成 23 年度も行ったが、平成 23 年度はお互いのボランティア活動についての質疑応答を中心に行ったため、話が分散してしまい、内容に深まりがなかったという反省が出た。そのため、今回の意見交換を企画するにあたり、テーマは「ボランティアの動機と意義について」に絞った。そして話し合いの流し方もワークショップ形式にし、(1)動機、意義について自分の考えを紙に書く、(2)自分の意見を発表し、ホワイトボードに分類して紙を貼る、(3)貼られた紙を見ながら質疑を行い、日独のボランティア活動の相違を考える、という流れを企画した。

③当施設の代表的なプログラム体験

プログラム体験では、当施設の看板プログラムである「登山」と「バウムクーヘン作り」を企画した。登山では、自然観察の講師を２名招いて、登山をしながら日本の自然にも理解を深めてもらうようにした。また山頂では、神話の舞台となった景色を見ながら国引き神話についての説明を聞き、その歴史を肌で感じてもらえるように企画した。なお、このプログラムも法

人ボランティアがバディとして同行し、登山をしながらお互いの交流を深められるようにした。

バウムクーヘン作りでは、ドイツのお菓子バウムクーヘンをみんなで一緒に作るという共通体験をして、楽しい雰囲気の中で交流を深めようと考えた。当施設の法人ボランティアの大半はこのバウムクーヘン作りをしたことがあるので、法人ボランティアがドイツ団に作り方の説明をし、一緒に作ることで交流を深められるようにした。そして、班を作って活動するにあたり、今までのバディをなくし自由に交流できるようにした。

（3）広報のポイント

本事業では、当施設ではホストファミリーの募集を行った。ホストファミリー16 家族を確保するために、平成 23 年度ホストファミリーを受けていただいた家族に今回も受けていただけるようお願いした。また、ホストファミリー募集のチラシを作り、当施設近隣の高校や図書館、国際交流に携わる諸団体にチラシを配り、広報した。その結果、平成 23 年度から引き続きホストファミリーを引き受けていただいた家族が 6 家族、平成 23 年度度のホストファミリーから紹介された家族が 3 家族、チラシを見て応募した家族が 7 家族あった。

（4）日程表

	6:30	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00
9/4(火)	東京プログラム(広島の団体を訪問)											津和野に移動		津和野着 対面		自由行動		宿泊 (津和野)
9/5(水)	起床	身辺整理		朝食 (津和野)	移動	津和野高校訪問 ①高校見学 ②津和野とドイツの交流紹介 ③高校生との意見交換 ④記念写真		昼食 (津和野)	三瓶に移動			施設案内 事業紹介		歓迎夕食会(食堂) ①挨拶 ②乾杯 ③神楽演舞 ④法人作り出しもの ⑤ドイツ団出しもの ⑥記念写真			自由行動		宿泊 (三瓶)
9/6(木)	起床	身辺整理	朝のつどい	清掃	朝食・休憩 (食堂)	三瓶プログラム① 女三瓶登山 ※法人ボラと一緒		昼食 (食堂)	法人ボランティアとの意見交換		ドイツ団 ミーティング	タべのつどい	夕食 (食堂)	自由行動		自由交流 (スポーツ・カプラなど)		宿泊 (三瓶)
9/7(金)	起床	身辺整理		清掃	朝食・休憩 (食堂)	三瓶プログラム② バウムクーヘン作り ※法人ボラと一緒		昼食 (食堂)	ドイツ団 ミーティング ※ホームステイ準備		ホストファミ リー対面式	ホームステイプログラム						
9/8(土)	ホームステイプログラム																	
9/9(日)	ホームステイプログラム								ホームステイ交流会 ①挨拶 ②ホストファミリー・ドイツ団からの感想 ③ドイツ団出し物 ④記念写真		ドイツ団 ミーティング ※評価会準備		夕食 (食堂)	ドイツ団 ミーティング ※評価会準備			宿泊 (三瓶)	
9/10(月)	起床	身辺整理		清掃	朝食・休憩 (食堂)	ドイツ団 ミーティング	評価会 (6研)		昼食 (食堂)	退 所								

（5）運営のポイント

①担当者間の連絡・調整

本事業を運営するにあたり、国立青少年教育振興機構の担当者、ドイツ団団長、通訳と相談しながら進めていくことができた。特に三瓶プログラム 2 日目の夜の活動では、ドイツ団の要望を聞いたうえで担当者間で協議して活動内容を決定し、ドイツ団にとって楽しい時間を過ごすことができた。

②ドイツ団と法人ボランティアのバディ制

三瓶プログラム前半でドイツ団と法人ボランティアがバディを組み、ドイツ団に三瓶の生活について説明したり、集合場所に案内したりしたことは事業を運営していく上で大きな力となった。このバディシステムのおかげで、ドイツ団もスムーズに当施設の生活について慣れるこ

とができたと思う。

③法人ボランティアの自己紹介カード作成

平成 23 年度度の反省から、今回はドイツ団向けに法人ボランティアのプロフィール一覧を作成した。この中には、法人ボランティアの所属や自己アピールなどを記載し、法人ボランティアとドイツ団との交流の話題作りになるようにした。

（6）安全管理のポイント

ドイツ団は日本滞在が 2 週間という長い期間であるため、疲れていることが予想された。そのため、プログラムは余裕を持って組むようにするとともに、ドイツ団の体調を確認しながら活動するようにした。

また、今回の三瓶プログラムの中で一番リスクが高いと感じていたものが登山プログラムであった。考えられるリスクとしては、①登山道の不備によるケガ、②熱中症、③虫刺され等による受傷が考えられたため、それぞれ対策をとった。

①に対しては、職員が数度にわたり登山の下見をし、その中で登山道に張り出している樹木の枝の伐採と、下草の処理を行った。②に対しては、参加者に水分を提供するとともに、登山の途中で自然観察を加えることで適度に休憩しながら登山できるようにした。③に対しては、事前に服装についてレクチャーしたり、虫よけスプレーを提供したりして対策を講じた。

また、バウムクーヘン作りでは、やけど防止のため全員に安全指導をするとともに、企業用手袋を提供し、安全に活動できるようにした。

（7）アンケートの満足度・おもな記述

本事業では最終日に評価会があった。その会で発言のあったことを三瓶プログラムを中心に記載する。

- 素晴らしい体験だった。文化交流やボランティア交流、若者同士の交流など、日本の多様な面を知ることができた。
- 他の国について学ぶことができるこの事業は意義がある。これからも続けてほしい。
- とてもたくさんの人と知り合えた。旅行では体験できないことである。
- 三瓶ではバディとして法人ボランティアと組んだので、日本の若者と知り合うことができた。日本の若者はとても親切だった。また、バディ以外の人とも交流ができ、一緒に活動できてよかった。
- 津和野プログラムでは、日独の学校の相違点が分かった。
- ホストファミリーとは、言葉の壁を感じることがあったが、楽しく過ごせた。
- この事業は、知識だけではなく、多くの喜びを与えてくれた。
- 日本とドイツのボランティアについて考えていくうちに、国と国とを比較することは難しいと気付いた。ボランティアの比較は、規模や内容、期間などの様々な視点で考えるべきだと分かり、視野を広げることができた。
- ドイツに帰ったら、日本文化を広めるために、Japan Day を開催したい。
- ドイツに帰ったらバウムクーヘン作りを企画したい。仲間のつながりを強めることが期待できる。

１０　成果と今後の課題

＜成果＞

①人的交流の深まり

本事業の成果としては、まずドイツ団と日本人の交流が深まったことがあげられる。ホストファミリーの感想にも、「娘たちがうれしくてうれしくて仕方ないという様子でしたから、他の家族の笑顔も最高でした」「子どもたちがだんだん積極的になり、いつもより明るく過ごせた」とあり、積極的に関わることで交流が深まり、楽しい時間を共有できたと思う。

②日本文化の再考

ドイツ団と生活を共にすることは、ドイツの文化を知ることはもちろん、日本文化について再考するいい機会となった。「滞在中、彼らに日本文化を紹介することで、日本文化の良さを再認識することができた」「もっと他の国の文化を知りたいし、日本文化についても他の人に知ってもらいたい」等の感想もあり、日本文化について再認識することができた。

③ボランティアについての見解の広がり

本事業に参加した法人ボランティアからは、「ボランティア活動をしていく中で、自分の活動が相手や環境にどのように影響を与えているかを考えるきっかけとなった」「この交流を通して、ボランティアに対する意欲がわいた」等の感想を得た。当施設の法人ボランティアにとっても、ドイツ団との交流を通してボランティア活動について視野が広がったことや自分のボランティア活動を振り返り、今後への意欲がわいたことは成果であろう。

＜課題＞

多様な活動をしているボランティアを集める

ドイツ団は、様々な地域から集まってきたため、それぞれが普段から行っているボランティアの内容も様々であった。一方、法人ボランティアは全員当施設でボランティア活動をしている学生であるため、全員が似たようなボランティア歴であった。そのため、意見交換の場面では、当施設の法人ボランティアの意見が重なる場面が見受けられた。これを改善するためには、当施設の法人ボランティアに加えて、環境に関してボランティアをしている人や災害地の復興支援をしている人などを招いて意見交換をすれば、さらに内容の濃いものができるのではないかと思う。

１１　普及計画・普及実績

本事業に関連する記事が山陰中央新報に掲載され、事業を広報することができた。

成果については当施設ホームページで紹介する。また、事業報告書を作成し、青少年教育施設、青少年教育関係機関等に送付し成果の普及を図る。

（担当　竹下　修二）